

修辞学

柳澤 浩哉

まず、ここ数年の収穫として二冊の翻訳書を紹介したい。一つは、サム・リース、松下祥子訳『レトリックの話 話のレトリック—アリストテレス修辞学から大統領スピーチまで—』（論創社、2014年）。本書は日本語で読める古典修辞学の解説書として最良のものであり、読みやすさ、情報の量、例文の豊富さなどで類書を圧倒している。特筆すべきは例文の質と量で、全編に引用文された質の高い例文に加え、独立項目として分析されるリンカーン、オバマ、ヒトラー、チャーチル、キケロ等々の分析が興味深い。内容がアリストテレスに偏り、理論の省略もあるが、幸い昨年は古典修辞学を丁寧に概観した論文が発表されている。荻野弘之「レトリックについて—その歴史と構造—」（『哲学科紀要』（上智大学哲学科）43号、2017年3月）。本論文はリースで手薄だったローマの修辞学にも詳しい。

もう一つの翻訳書は、ロバート・マッキー、越前敏弥訳『ダイアログ』（フィルムアート社、2017年）。脚本家向けに書かれたシナリオ作法であるが、せりふの技巧を論じた第一章は、質の高い修辞学書として読める。例えば、感情的な人間・積極的な人間・知的な人間、それぞれが好む語彙や文構造についての考察は、文法要素の修辞効果を研究したりチャード・ウィーバーを彷彿させ、サスペンス効果を高める掉尾文（最後にポイントを明かすせりふ）の分析はアリストテレスの興味と重なる。いずれも、様々

な素材の分析に応用可能な知見である。

日本語の文献に移ろう。西洋修辞学の論文は少ないながら着実に生産されている。ただし、大半が西洋古典の領域である上に、古典作品と修辞学理論を比較する内容が多く、本学会の興味と重なる論文は少ない。その中で、シェイクスピアのセリフ中の“action”のについて、この語が古典修辞学の五領域の最後に位置する「所作」を踏まえていた可能性を示し、新たな解釈を展開した次の論文は表現の観点から興味深い。鶴田学「行動という名前の病—近代初期英国の修辞学とシェイクスピアの名台詞—」（『福岡大学研究論集A 人文科学編』16(3)、2017年1月）。

認知言語学は野田大志氏による解説があるが、修辞学の観点から次を紹介したい。小松原哲太『レトリックと意味の創造性』（京都大学学術出版会、2016年）。分析の着地点を修辭的效果においた点、認知における換喩の重要性を例証した点などを高く評価したい。ただ、修辭的效果が意味のズレとして測られている点が、修辭学的には残念である。修辞学では修辭的效果を、ある側面を誇張し他の側面を隠蔽する効果と考えるからである（つまり、強弱の差はあるが、全ての表現が修辭的效果を持つ）。小松原氏も換喩（隠喩ではない）の誇張効果に言及しているので、換喩から誇張効果を測る研究を待ちたい。方向は異なるが、次の論文も認知から修辭的效果に踏み込んでいる。廣田篤「クジラ構文」の意味構造と認知的な特徴に関する一考察」（『人間社会環境研究』（金沢大学大学院社会環境研究科）第34号、2017年9月）。

（広島大学）